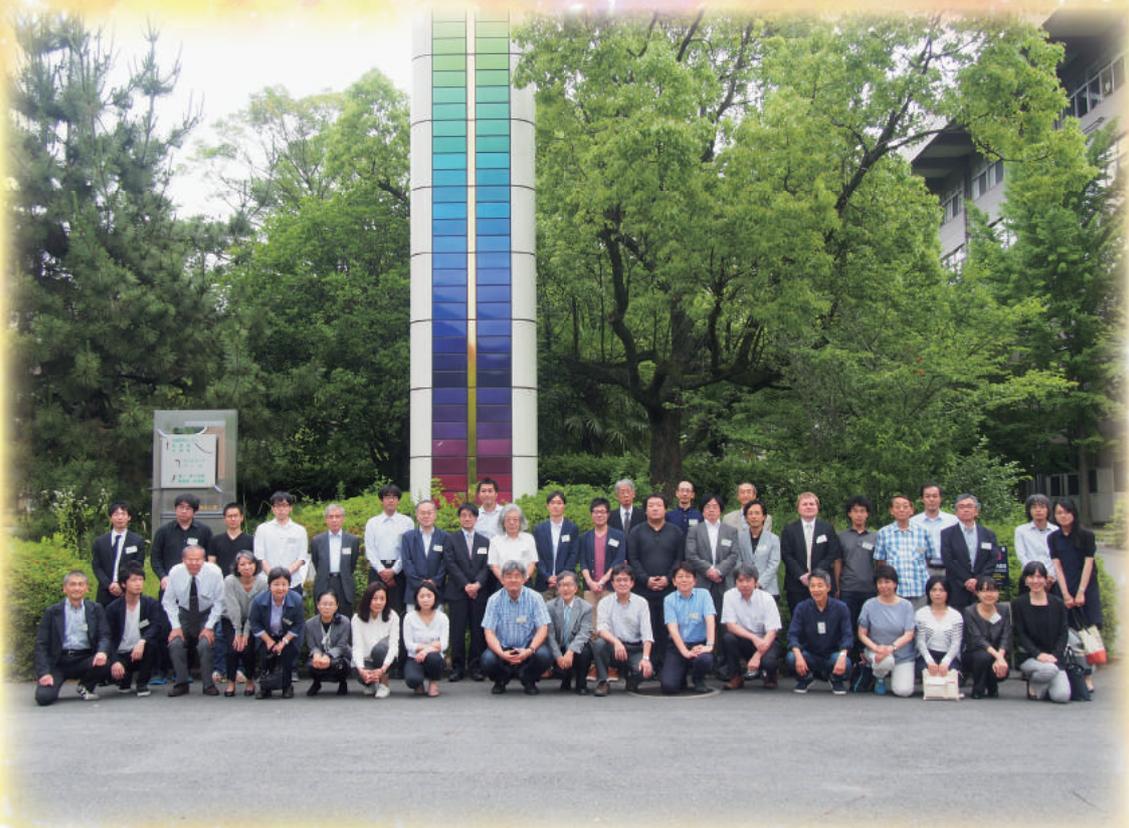


The Japanese Society for Time Studies
日本時間学会ニュースH28年度第2号 (2016年12月)



目 次

I	第8回大会報告	3
	i. 大会概要	4
	ii. 平成28年度総会報告	5
II	第8回大会発表	10
III	会員異動	12
IV	新会長および新理事紹介	14
V	国際時間学会参加報告	15
VI	新会員の紹介	18
VII	学会誌「時間学研究」投稿のお願い	19
VIII	第1回時間学国際連携会議を開催	20
IX	会員著書・新刊紹介コーナー	21
X	来年度開催校のお知らせ	22
XI	事務局からのお願い	22

表紙写真

京都工芸繊維大学
松ヶ崎キャンパス「大学の塔」前にて
学会2日目の記念撮影
平成28年6月11日

発行人 日本時間学会 会長 一川 誠

〒753-8511 山口市吉田1677-1

山口大学時間学研究所内

日本時間学会事務局

TEL & FAX 083-933-5848

mail@timestudeis.net

http://timestudies.net

I. 第8回大会報告

第8回大会および公開シンポジウムは、下記の日程で開催されました。

たくさんの方々にご参加いただき、ありがとうございました。

日時：2016年6月11日（土）－12日（日）

場所：京都工芸繊維大学 松ヶ崎キャンパス60周年記念館 記念ホール

日本時間学会第8回大会

6月11日（土）AM 自由報告 【セッションⅠ】

PM 日本時間学会 理事会

時間学公開学術シンポジウム

情報交流会

6月12日（日）AM 日本時間学会 総会

PM 【セッションⅡ】 【セッションⅢ】

i. 大会概要

<時間学公開学術シンポジウム>

「紛争後社会の再生と記憶」

苛烈な紛争を経た社会では一般に、紛争時の出来事（とりわけ犠牲者・加害者たちに関連した出来事）にまつわる記憶を膨大な量で収集・記録化する、ある種の歴史的なプロジェクトが進められる。国際機関、国家、司法、メディア、民間団体など、さまざまな主体によって「あの紛争でいったい何が起こったのか」についての証言＝記憶が人びとから引き出され社会に向けてひろく開示・伝達される。紛争後（戦後）社会に共通してあらわれるこの種の運動は、どのような社会的条件に枠づけられつつ、どのような形式で進められるのか。過去の〈真実〉を探り出そうとするこうした試みは、紛争後の混沌的状况におかれた社会や個人が秩序と日常を取り戻す上でどのような意義や作用を含んでいるか。また、紛争についての異なる〈真実〉が競合・錯綜する状況には、当該社会の再生にとってどのような正負の可能性が認められるか。このシンポジウムでは、南アフリカなど冷戦後の紛争後社会での特徴的な取り組みから、こうした問いについてかんがえたい。それらは、現代日本を生きる人びとに対してもきわめて現在の意味を含んだ問いとなりうる。

日時：6月11日（土）14：00～17：00

会場：京都工芸繊維大学60周年記念館大ホール

講演：

- 『過去に触れつつ遠ざける一移行期正義における記憶表象』

阿部 利洋（大谷大学）

- 『記憶の「封印」と「発明」の歴史社会学』

福間 良明（立命館大学）

平成28年6月11日（土）、日本時間学会との共催で、京都工芸繊維大学にて、時間学公開学術シンポジウム「紛争後社会の再生と記憶」を開催しました。

紛争という暴力的な過去を経験した社会と個人の回復にとって、紛争当時の出来事を社会的に開示し共有することは、どのような意味を持っていると理解できるか。体制転換後において紛争時の出来事をあかみにする試みは、どのような主体によって、どのような仕方で進められ、またどのような現実や思想を事後的に触発することになるのか。このような問いについて考えるという趣旨のもと、阿部利洋先生（大谷大学文学部）、福間良明先生（立命館大学産業社会学部）にご講演いただきました。



まず阿部先生の基調講演「過去に触れつつ遠ざける」では、冷戦後のアフリカ・ラテンアメリカ・アジア地域の内戦経験社会で、紛争時の出来事が公的回路を通じてどのように表象されてきた（いる）のかについてお話いただきました。南アフリカやカンボジアなど、紛争から日常への移行期にある一連の地域で見られる公的紛争記憶表象の制度・施設（法廷、真実委員会、メモリアル施設）が固有の仕方で紛争時の犠牲・加害の記憶を開示しつつ、それらの記憶を空間的・時間的に隔離するという二元的な作用を含んだ装置であることを、現代の紛争後社会の文脈に即しつつ講演いただきました。続いて福間先生のコメント「記憶の「封印」と「発明」の歴史社会学」では、大戦終結直後から1960年代前後の日本社会についての事例（極東国際軍事法廷、各地域の戦跡・モニュメントなど）をふまえて、（1）司法を通じた過去処理の限界や不十分さが意図せざる結果として紛争記憶の開示・共有にとって肯定的な作用をもたらす点には大きく同意できること、（2）ただし紛争当時の政治社会状況に即したときに加害者たちが帯びるある種の「正しさ」＝正統性や、真実委員会の場で作用する固有の力学を考慮する場合、紛争後社会の過去処理モデルには一定の限界も認められること、等々、基調講演について精緻な批判的検討を加えられました。映像・写真資料を駆使しつつ、紛争の記憶をめぐる現代政治のさまざまな容貌が語られるお二人のお話により、来場者の方々も熱心に聞き入っていました。福間先生のコメントに続き、両講師によるディスカッション（加害者・被害者の弁別の難しさ、「責任」の独特な意味などについての討議）、ならびに会場との質疑応答が行われ、会は盛況のうちに閉じました。（学会事務局 右田裕規）

続いての、情報交換会では、会場の京都工芸繊維大学生協による上質なケータリングサービスに感激、美味しい料理を囲みながら賑やかに楽しく交流が持たれました。

会場のあちらこちらでは、新入会員の皆様が先輩方の話に真剣に耳を傾ける様子も見られました。



ii. 平成 28 年度総会報告

- 1, 開会
- 2, 挨拶
日本時間学会会長 辻 正二
- 3, 議長選出 織田一朗理事
- 4, 報告事項 藤沢健太理事
会員に関する報告 学会誌編集 平成27年度事業報告および決算報告 監査報告
- 5, 審議事項
平成28年度事業計画および予算案の承認 来年度大会開催地
会長任期満了に伴い、新会長に一川誠氏および新理事を選出した。
- 6, 閉会

平成 28 年度日本時間学会役員

会 長	一川 誠
監 事	武藤 正彦
監 事	山本 晴彦
顧 問	広中 平祐

理 事

担 当	理 事 名
1) 企 画	橋元淳一郎・長嶋 洋一
2) 学術推進・研究	井上 慎一・細井 浩志
3) 編集（機関誌編集・発行）	藤澤 健太・長谷川貴之
4) 渉外・広報	織田 一朗・小山 恵美
5) 財 務	三池 秀敏・辻 正二
6) 庶 務	植村恒一郎・杉野 法広
7) 学 会 運 営	松野 浩嗣
8) H29年度大会理事	三池 秀敏

各担当理事の業務

- 1) 企画：学術研究大会の開催のための企画・立案など
- 2) 学術推進・研究：大会以外の全般的な学術推進・研究活動
- 3) 編集の業務：機関誌の編集・発行
- 4) 渉外・広報：対外的な活動や広報活動
- 5) 財務：学会の財務体質の安定化のための各種活動
- 6) 庶務：学会事務局の単年度毎の庶務・会計の活動
- 7) 学会運営：学会の運営に関すること
- 8) 平成29年度大会実行委員長

平成27年度日本時間学会 決算報告書

(単位:円)

1. 一般会計

項目	収入	歳入	歳出	摘要
1. 会費	275,000			会費(83名分)
2. 交付金	0			
3. 寄付金	0			
4. 繰越金	1,317,182			
5. 雑収入	0			
6. 大会運営費	49,500			
7. 事業費	171,720			時間学研究所 9巻(300部)単価@500円
印刷費	81,000			ニュースレター第3号単価@270円
郵送料	25,825			ニュースレター郵送料
印刷費	6,434			第9巻別刷り・会費納付書
会議費	61,261			国際シンポジウム・セミナー他
8. 管理費	90,000			ウェブリッジ大卒
雑費交通費	1,586,182			
合計	1,586,182	445,730		

差引残高 1,150,452

2. 特別会計(現金出納)

項目	収入	歳入	歳出	摘要
4. 前年度繰り越し	24,787			
6. 大会運営費	49,500			10,440/ハガキ等
6. 大会参加費	37,000			参加費1,000×37人
6. 大会懇親会参加費	66,000			参加費3,000×22人
6. 大会懇親会支払	121,728			懇親会・お弁当等
7. 事業費 送料運搬費	18,193			切手代
8. 管理費 通信費	2,176			ドメイン・サービス利用料
8. 管理費 雑費	2,581			タックシート他
合計	177,287	155,118		

差引残高 22,169

平成28年4月26日

会計監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 山本碩孝 武藤正彦

日本時間学会 平成27年度収支決算(案)

平成26年4月1日～平成27年3月31日

科目	26年度予算額	27年度予算額	増減
I. 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用収入	0	0	0
基本財産産利利息収入	0	0	0
印税収入	0	0	0
印税収入	0	0	0
会費収入	500,000	459,000	500,000
事業収入	1,300,000	1,600,000	150,000
時間学研究所発行事業収入	0	0	0
購読料	0	0	0
大会事業収入	130,000	160,500	150,000
大会運営費	22,500	20,000	20,000
大会参加費	50,000	42,000	50,000
懇親会参加費	80,000	96,000	80,000
補助金収入	0	0	0
定期預金貸付補助金	0	0	0
公開講座委託補助金	0	0	0
大会開催補助金	0	0	0
寄付金収入	0	0	0
寄付金収入	0	0	0
雑収入	0	0	0
その他の収入	0	0	0
事業活動収入計	630,000	619,500	650,000
2. 事業活動支出			
(1) 事業費支出			
時間学研究所発行事業費	480,000	261,679	520,000
直接出版費	440,000	236,608	500,000
人件費	0	0	0
謝金	0	0	0
送料運搬費	40,000	5,071	20,000
消耗品費	0	0	0
雑費	0	0	0
時間学ニュースレター発行事業費	50,000	81,000	80,000
印刷費	80,000	80,000	80,000
大会事業費	220,000	151,281	190,000
予備集印刷費	0	0	0
謝金	20,000	0	10,000
送料運搬費	0	7,800	10,000
会場費	0	0	0
大会運営費	50,000	22,500	30,000
消耗品費	0	0	0
人件費	0	0	0
雑費	50,000	0	20,000
旅費交通費	0	0	0
懇親会費	100,000	120,981	120,000
事業費支出計	750,000	493,960	790,000
②管理費支出	92,000	67,707	77,000
人件費	0	0	0
会議費	0	11,230	10,000
旅費交通費	30,000	30,000	30,000
通信費(レンタルサーバー利用料)	10,000	16,313	17,000
印刷費	2,000	0	0
消耗什器備品費	0	0	0
謝金	0	0	0
雑費	50,000	10,164	20,000
管理費支出計	92,000	67,707	77,000
事業活動支出計	842,000	561,667	867,000
前年度繰越収支差額	-212,000	-217,000	-5,000
1,284,136	1,284,136	1,284,136	
1,072,136	1,341,969	1,124,969	
		52,833	

平成27年度事業報告

- (1) 第7回大会開催
平成27年6月6日（土）－7日（日）、第7回大会を山口大学で開催した。
- (2) 公開学術シンポジウム
平成27年6月6日 第7回大会に合わせて公開学術シンポジウム「宇宙と人間と時間」を、山口大学時間学研究所と共催した。
- (3) 国際シンポジウム
ケンブリッジ大学のBrigitte Steger先生をお招きし、12月18日（金）に時間学国際研究会を、12月19日（土）に時間学国際シンポジウム「眠りの時間学－世界が認めたニッポンの居眠り－」を、山口大学時間学研究所と共催した。
- (4) 10月2日（金）アクロス福岡に於いて「時間学アフタヌーンセミナーin福岡2015」を時間学研究所と共催した。
- (5) 理事会・委員会等 平成27年6月6日 理事会を山口大学で開催した。
- (6) 日本時間学会ニュース
平成27年3月に1号、5月に2号、平成28年3月に第3号を発行した。
- (7) 日本学術会議協力学術団体へ申請、7月30日ヒアリングを経て12月18日付けで協力学術研究団体としての指定を受けた。
- (8) 学会誌「時間学研究」発行
平成28年3月第9巻の発行。ウェブ公開のためのJ-STAGE登録は2015年11月9日付けで登録誌として採択。ただし科学技術振興機構から提示された行程では実際に公開が可能になるのは2017年以降になる。
- (9) 会員研修 総会で会員研修の企画を募集した。
- (9) 学会HP 学会HPで活動などをチェックして、学会へ入会する会員が増えつつあるため、引き続き学会HPからの情報発信を強化する。
- (10) その他の活動 ホームページによる情報発信、イベント通知、マスコミ対応等の活動を随時行う。
- (11) 海外研究機関との交流について
4月15日～17日ケンブリッジ大学で開催されたワークショップに参加。Brigitte Steger先生のご紹介により、8月10日国際時間学会（International Society for the Study of Time）シュタイネック・ラジ会長（チューリッヒ大学文学部東洋学科長・日本学教授）が来日し、山口大学でセミナーを開催した。会長から日本時間学会との研究連携の提案があり、H28年6月にイギリス・エジンバラ大学で開催される国際時間学会での論文・学会発表依頼を会員に周知し、総会にて今後の連携体制について検討した。

平成28年度事業・活動計画

- (1) 第8回大会開催

平成28年6月11日（土）－12日（日）、第8回大会を京都工芸繊維大学で開催する。

(2) 公開学術シンポジウム

平成28年6月11日 第8回大会に合わせて公開学術シンポジウム「紛争後社会の再生と記憶」を、山口大学時間学研究所と共催する。

(3) 国際シンポジウム

例年、山口大学時間学研究所との共催シンポジウムを企画していたが、今年度は未定。

(4) 「時間学アフタヌーンセミナーin福岡2016」を、時間学研究所と共催する。

(5) 理事会・委員会等

平成28年6月11日 理事会を京都工芸繊維大学で開催する。

日程は未定だが、編集委員会を開催予定。

(6) 日本時間学会ニュース

平成28年4月に1号、2号を12月に発行予定。

(7) 学会誌「時間学研究」発行

今年度中に10巻の発行を予定している。

(8) 会員研修

総会で会員研修の企画を募集する。

(9) 学会HP

学会HPで活動などをチェックして、学会へ入会する会員が増えつつあるため、引き続き学会HPからの情報発信を強化する。

(10) その他の活動

ホームページによる情報発信、イベント通知、マスコミ対応などの活動を随時行う。

(11) 海外研究機関との交流について

H28年6月26日～7月2日にイギリス・エジンバラ大学で開催される国際時間学会への参加および学会発表は、日本時間学会からは6名がエントリーしたが、そのうち2名がアクセプトされた。今後の国際時間学会との連携についてさらに協議を続ける。

理事会報告

平成27年6月6日、山口大学・大学会館にて平成27年度学会理事会が開かれ、辻正二会長を議長として13名の理事により議事が進められた。議題・報告事項は、①新入会員の承認に関する報告、②平成26年度事業報告、③学会誌の発行状況、④平成26年度決算報告及会計監査報告、⑤平成27年度事業計画・予算案、⑥来年度学会大会の会期・開催場、⑦国際時間学会との連携、の7件で、①～⑤については出席理事からの意見・提案にもとづき若干の修正を加えた上で承認された。また⑥については、会期は平成28年6月11日・12日、会場は京都工芸繊維大学を候補地とすること、⑦については翌日の学会総会にて意見集約を行うことが確認された。

編集委員会報告

『時間学研究』発行は平成27年3月に第9巻（日本時間学会誌第6号）が発行された。

次号については、現在、特別寄稿を複数名に依頼するとともに、学会HPで投稿を呼びかけている。

また先の紙面理事会でご指摘のあったウェブ上でのコンテンツ公開は、数年後までにJ-STAGE（科学技術振興機構）にプラットフォームが一本化されることを受け、J-STAGEの新規公開制度にエントリーすべく準備を進めている。

II. 第8回大会 大会発表

大会初日は、辻正二学会長および開催校として小山恵美実行委員長の挨拶のあと、2日間にわたる大会発表がありました。



（左：辻正二日本時間学会長 右：小山恵美実行委員長）

セッション I		発表者	所属	タイトル
座長 細井 浩志	1	10:20	オオクボ シン 大久保 心	慶應義塾大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程 就学前教育における社会的時間の形成－質的調査による園児と保育士の相互作用分析から－
	2	10:35	アンドウ タミジ 安東 民児	羽衣国際大学 東大寺修二会の時間 ～「走り」の行法から～
	3	10:50	織田 一朗	時の研究者／山口大学時間学研究所客員教授 スマートウォッチは、果たして成功するか。～時計の商品特性を考察する～
	4	11:05	辻 正二	保健医療経営大学 時間学にとっての平和の問題
座長 橋元淳一郎	5	11:20	椿井 真也	立命館大学／学振特別研究員 Prigogine の時間の矢についての批判的再検討
	6	11:35	加藤 宗博	(株) デンソー 時間推移に伴うエントロピー変化についての考察
	7	11:50	長嶋 洋一	静岡文化芸術大学 内受容感覚バイオフィードバック反応を高速化する情動／感情



大久保さん

安東先生

織田先生

辻先生

椿井さん

加藤さん

長嶋先生

セッションII		発表者	所属	タイトル	
座長 植村恒一郎	1	12:40	安永 信二	九州産業大学国際文化学部	「アテナイの暦と日時計ーヘレニズム期を中心にー」
	2	12:55	右田 裕規	山口大学時間学研究所	通勤者・ハチ公・定時性：20世紀初期の〈渋谷〉の時間的特性にかんする歴史社会学的考察
座長 野村 直樹	3	13:10	Tishchenko Serge	山口大学時間学研究所／モスクワ大学	Time factor in asymptotic computational complexity and time-optimal divide and conquer algorithms
	4	13:25	和田 ^{ユキナ} 侑那 小山 惠美	京都工芸繊維大学	就寝から入眠までの「時間」；主観的睡眠感、睡眠ポリグラフ、体動情報による多面的評価
	5	13:40	杉林 稔	愛仁会高槻病院 精神神経科	暦時間と精神科臨床
	6	13:55	村中 智明	名古屋大学大学院 理学研究科生命理学専攻 計時機構グループ博士研究員	植物の中を流れるヘテロな時間



安永先生



右田先生



Tishchenko
先生



和田さん



杉林先生



村中さん



会場からは厳しい質問が



セッションIII		発表者	所属	タイトル	
座長 藤沢 健太	1	14:30	佐々木恭志郎 山田 祐樹	九州大学基幹教育院・大学院人間環境学研究院・学振特別研究員	クロノ・トリガー：規則性が誘発する時間バイアス
	2	14:45	郷原 ^{ゴウハラ} 皓彦 ^{アキヒコ} 佐々木恭志郎 山田 祐樹	九州大学人間環境学府・行動システム専攻心理学コース／学振特別研究員	オノマトペから想起される自伝的記憶の古さ
	3	15:00	林 ^{ハヤシ} 美都子 ^{ミツコ}	北海道教育大学 教育学部函館校	懐かしさが時間評価に与える影響に関する実験的検討
	4	15:15	一川 誠	千葉大学文学部	時間知覚における不良設定問題解決過程



佐々木さん



郷原さん



林先生



一川先生



III. 会員異動

平成 27 年度退会者

平成28年度会員

	氏 名
1	伊藤美登里
2	塩田 正俊
3	水田 隆憲
4	平野 均
5	内藤 博夫
6	鍋山 洋子
7	中村 寛樹
10	匿名 3名

平成27年度会員数	193名
平成27年度退会者数	10名
入会申請者数	19名
所在不明者数	34名
平成28年度実質会員数	168名

青色は学生会員

平成27年度入会申請（平成27年6月～平成28年6月）申込み順

	氏 名	所 属	専 門 分 野
1	長峯 裕子	宇部高等工業専門学校	非線形現象の物性研究
2	松尾 浩一	松尾耳鼻咽喉科	医学
3	谷守 正寛	甲南大学	日本語学
4	紙野 雪香	大阪府立大学地域保健学域看護学類 基礎看護学領域看護教育学分野	看護教育学・ ナラティブアプローチ
5	杉林 稔	社会医療法人愛仁会高槻病院 精神科	精神医学
6	桑代 智子	医療法人内海慈仁会姫路北病院	臨床心理学
7	Tishchenko Serge	山口大学時間学研究所/ モスクワ大学	時間経済学
8	<small>オオクボ シン</small> 大久保 心	慶応義塾大学大学院社会学研究科	時間社会学・教育社会学
9	村中 智明	名古屋大学大学院理学研究科	光合成生物の生物時計
10	<small>ゴウハラ アキヒコ</small> 郷原 皓彦	九州大学大学院人間環境学府	実験心理学
11	佐々木恭志郎	九州大学基幹研究院	実験心理学
12	永石 尚也	保健医療経営大学	法哲学・医事法学
13	<small>ワダ ユキナ</small> 和田 侑奈	京都工芸繊維大学／ロマンス小杉	睡眠環境学
14	山城 大地	中央大学大学院文学研究科	認知心理学・時間概念の認知
15	野上 大輔	保健医療経営大学	保健医療経営学・電気システム
16	米田 雄也	医療法人弘恵会ヨコクラ病院	保健・医療・経営
17	楠本和歌子	神戸山手大学	臨床心理学
18	鹿島 隆	日本大学大学院文学研究科哲学専攻	科学哲学・宇宙物理論
19	<small>トキイ シン</small> 時井 真	北京大学法学院/ 方達法律事務所（北京オフィス）	知的財産法

今年度の総会から、新入会員の紹介コーナーを設けました。
今大会では新入会員19名のうち、14名が紹介されました。



新入会員の紹介

左より 和田侑那さん 村中智明さん 大久保心さん 時井真さん 杉林稔さん
右より Tishchenko Sergeさん 野上大輔さん 桑代智子さん 山城大地さん
楠本和歌子さん



左より 松尾浩一さん
郷原皓彦さん
谷守正寛さん
佐々木恭志郎さん

それぞれ、自身の研究フィールド、今後学会に期待することなどを交えてコメントして下さいました。

代表してTishchenko Sergeさん（モスクワ大学/山口大学時間学研究所）のコメントを紹介します。

I am very excited to precipitate this conference.
My scientific interests focus on the graph theory, game theory and mastoids in mathematics field and the use of applied mathematical methods in economic sciences. My researches field is between the mathematics, economics, and sociology and computer sciences. For every given problem I am interested in constructing efficient algorithms in terms of time and solving the problem.

IV. 新会長および新理事の紹介



会長就任にあたって

一川 誠（千葉大学）

6月11日、12日に京都工業繊維大学で開催された第8回大会中の理事会で会長に推挙され、総会で承認されました。学会立ち上げから8年にわたって活動を引っ張ってこられた辻正二初代会長の後を受け、二代目の会長を務めることになりました。今後4年間、辻先生の築かれた土台の上で、日本時間学会と会員の皆さんの時間学関連の研究を発展させられるよう努力してまいります。

これまで理事として8年間、日本時間学会の活動を見てきましたが、本学会には、学際的な研究分野としての独自の可能性があるのと同時に、難しさもあるように感じております。会長としての任期中は、学際的領域の学会としての強みをさらに強め、弱いところがあれば、新企画のアイデアなどで補っていければと考えております。

学際分野の学会として強みに関しては、特に毎年の大会において、幅広い分野での時間に関わる研究の動向を知ることができます。これは、私自身、研究者としての視野を広げる上でも、とても貴重な機会であると感じております。これからも、本学会に接することで会員の皆様が時間に関する多様な研究分野の動向や最新情報を知ることができる場になりたいと考えています。

その一方で、時間学会の問題として、大会における個別の領域での議論を深めることが難しい点を挙げるができると思います。大会での限られた時間の中で、多くの分野の研究者が発表することになるため、個別の分野での議論に使える時間が短くなるのは仕方ないことではあります。しかしながら、特に、若手の参加者からは、この点に関する不満を聞くことが何度かありました。理事の先生方とも相談し、何か対策を考えたいと思っております。

この問題に関しては、大会における一般発表ではなく、大会における公開シンポジウムや、大会外でのフォーラムやシンポジウムなどの特別企画を通して対応していけないかと考えております。またその他にも、それぞれの専門分野における研究関連施設の見学・研修などの特別企画なども実施し、各領域における最先端の研究状況を、他の領域の研究者にも触れられる機会を作ることが出来ればと考えております。

また、本学会の重要な課題として、学会員を増やす必要があります。現在の会員数は160人ほどということですが、安定した学会活動のために、会員数をもっと増やしたいと考えています。そのためにも、まずは、学会やその活動を魅力的なものにする必要があります。たとえば、国際時間学会との協力体制の構築や、学会誌『時間学研究』の充実なども図りたいと考えております。

先日の大会の折、何人かの理事の先生方とのやり取りの中で、学会のロゴやシンボルマークなどについてデザインコンペなど開催してはどうかという話が出ました。確かに本

学会には、まだロゴやシンボルマークのようなものはありません。学会ロゴやシンボルマークのデザインコンペなどの企画を開催すれば、デザインやアート分野の会員を増やすことにもつながるかもしれません。是非実現したい企画です。また、学会の企画について、会員の皆様からいろいろとアイデアをいただきたいと考えております。

今回の大会では、橋本淳一郎先生、長谷川貴之先生、長嶋洋一先生にも新たに理事に就任していただきました。新理事を含めた理事の先生方の助けも借りて、日本時間学会および時間学研究所を盛り上げていきたいと考えております。会員の皆様、よろしく願いいたします。

橋元淳一郎 理事

最近、大学を定年退職しました。作家と予備校講師は現役です。これからは電子出版の時代と捉え、悪戦苦闘しながら個人出版を進めています。時間学会の魅力は、会員の研究分野が多岐にわたり、専門に特化していないところだと思います。微力ではありますが、三足の草鞋の経験を生かして、少しでもお手伝いが出来ればと思っています。どうぞよろしく願い致します。

長谷川貴之 理事

数学を背景にして、行動科学・神経科学にまたがったフィールドで時間知覚を対象とした研究をしています。動物実験によりデータを得て数理モデルを使うといった、物理学の創成期に相当するような研究をしています。他の学会では収まり切れない学会員による広範囲なご研究のサポートが少しでもできたら嬉しく思います。勉強不足ですが、どうぞ宜しく願い申し上げます。

長嶋 洋一 理事

メディアアート領域で、作曲・研究・開発・教育などの活動を進めています。メディアデザインには知覚認知の理解が不可欠ということで基礎心理学の領域も勉強していますが、どこにおいても常に「時間」が重要だ、と回帰してくることに驚く日々です。

なんでもありの凄い時間学会に勉強のために参加していますが、これまでの経験や関連領域の広さを学会のために少しでも役立てることができれば、と思っています。どうぞ宜しく願いします。

V. 国際時間学会参加報告

平成28年6月26日（日）～7月1日（土）の期間、英国Edinburgh大学で開催された、The International Society for the Study of Time Sixteenth Triennial Conference and the 50th anniversary of the founding of the ISST. “Time’s Urgency” 26 June to 2 July 2016, University of Edinburgh, Scotland UK. に、日本時間学会からは、椿井真也さん（立命館大学・学振特別研究員）が参加しました。

国際時間学会 (ISST) 2016に参加して

椿井真也 (立命館大学/日本学術振興会特別研究員)



2016年6月26日から7月2日にかけて、英国エジンバラ大学にて開催された国際時間学会 (ISST) 2016に参加・発表する機会を得たので、この場を借りてその内容を報告したい。

日本からエジンバラへの直行便がないため、私の場合、成田からカタールのドーハを経由するエジンバラ行きとなったこともあって、現地到着日はエジンバラの街中を散策する余裕もなく、直接エジンバラ大学構内にあるゲストハウスに向かうことになった。初日夜はレセプションで学会参加者やその家族の人たちが久方ぶりの再会を祝福しあう中に、下手な英語ながら会

話に参加した初対面の私を歓迎してくれて上機嫌になったこともあって、何杯ワインを飲んだか覚えていないが、ちょうど英国のEU離脱問題の渦中であつたことから、この種の政治・社会問題が話題に上つていただけにははっきりと覚えている。参加者の出身国は、英国や米国がやはり多く、次いでフランスやドイツ、スイスなどで、珍しいところでメキシコなど中南米の方々といった構成だった。日本を含めアジア諸国からの参加者は私一人だけではなかつたと思われる (もともと、アジア系の研究者もいたが、本拠地を米国においている人々だった)。シュタイネック会長に日本時間学会事務局の平田さんから預かっていた日本時間学会の活動内容がわかる学会誌など手渡しして初日は終了した。

翌日から5日かけて各自の発表になったが、ISSTは「時間」をテーマに様々なディシプリンを背景とする研究者が集う学際的な学会という性格上、研究者の専攻領域やその発表内容も千差万別、哲学や文学または社会学、そして物理学や情報科学ないし計算機科学、経済学や生物学や心理学など日本でも馴染みの既存ディシプリンの研究者が圧倒的であつたが、中には米国で特に盛んになっているように思われるフィルムスタディーズの研究者も参加していた (ティータイムで話した女性研究者は、勅使河原宏や大島渚などの作品も研究対象としており、その話で結構盛り上がった)。そこで感じたことは、こうしたフィルムスタディーズの専門家だけでなく、翻訳を通じて日本の文学作品や映画などに親しんでいる欧米の学者が意外に多いということだった。中でも、日本からの唯一の参加者である私を気遣ってくださり色々お世話になったスイスのチューリッヒ大学で研究している女性研究者は、戦争や大地震などの災難を文学がどう受け止めてきたのかということ



をテーマに、それと「時間」の問題系を絡ませた発表をし、外国の方が日本の惨事と文学とのつながりをどのように感じとっているのか、普段では気がつかない点に蒙を開かされたりもした (そのことで色々質問もしたこともあって、特に仲が良くなり、彼女が鼻

真にしている古井由吉の『仮往生伝試文』の初版本を私が持っていたので、帰国後彼女の元を送ったりもした)。

その他にも分析哲学の主題化された問題系を中国哲学や仏教思想との比較から論じる発表や生命科学から

「時間」意識の発生を追求する研究の発表など、私の専攻である科学哲学にとって密接に関連する発表もあり、普段つながりを意識しないような発表もあり、興味を広く持っている人ならば相当楽しめた学会ではないかと思われる。特に、それぞれの発表に対して「領域侵犯」おかまいなし、遠慮会釈なく飛び交う質疑の応酬には、それが概して日本の学会にやや欠けている要素ではないかと感じてきた私にとって、新鮮であったことはもちろん、それ以上に羨望の念を持ったことも確かである。日本の学会にも良さはあるが、こういったいい意味での「遠慮のなさ」は、丁々発止やりあうオープンな場において真理を探求していく営みである学問の発展のためには必要不可欠な要素ではないかと、改めて考える契機にもなったことは確かである。

学会4日目に私の発表はあった。The Timeless Theory and Modal Realismと題する、文字通り物理学者Julian Barbourの無時間的時間論の再検討と、当該理論の様相実在論との親和性を論じ、物理学や哲学において主要な論点の一つを形成するPresentismやExternalismの対立を超克する方途を探ろうとする内容の発表であったが、発表の四分の一ほどをBarbourの研究内容を紹介することになったので、特に物理学や哲学における時間論に不案内な研究者の方々から、当日の夕方に講演が予定されていたBarbourの理論の概要がよくわかったとの反応をいただいた。

ただ残念なことに、Barbourの講演は実現しなかった。というのも、Barbourのお連れ合いの御不幸があって講演どころではなくなったからである。Barbourの理論は、私が京都大学に在籍していた頃から研究テーマの一つとして最も関心を抱き、一度社会人になってから再びアカデミズムに戻るまで一貫して論文等を追っかけて続けてきた存在だけに、Barbourに会えなかったことは残念で仕方がない。しかし、御家族の御不幸とあってはやむを得ないことである。代わりに、Barbourと共同で研究しているオックスフォード大学の研究者が急遽講演することになり、Barbourの理論の説明というより、それ以前に物理学が「時間」をどのように扱ってきたのかをニュートン力学から熱力学、相対性理論や量子力学への物理学の発展過程に沿って整理し、それを今日の宇宙論につなげる啓蒙的な内容にとどまっていたが、時々ジョークを飛ばしながらの面白い講演だったのが救いであった。

最終日の夜は、ちょっとした晚餐とその後のダンスパーティで、皆、酒が入るたびに益々陽気になってダンスや会話を楽しみながら次回の再会を約束して、日本人の私としては「情熱的な」挨拶を交わして別れを惜しみあった。シュタイネック会長からも、日本の研究者の方々の協力によって、もっと国際色豊かで学際的な大きな学会にしていきたい、との言葉をかけられた。その他の参加者からも、もっと日本から来てほしいとの声もあった。文化的背景の異なる世界中の研究者が一堂に会する機会というのは、そう多くはない。こうした貴重な機会をもっと活用していくことで、自らの研究にとっての新たな刺激としたいという思いを強くする経験であったことは間違いない。(了) 最終日のバンケット会場 →



VI. 新入会員紹介

日本時間学会会員の皆さま、初めまして。今年度入会いたしました、神戸山手大学の楠本和歌子と申します。専門は臨床心理学で、現在は大学の心理学コースで専任講師として勤務しながら、スクールカウンセラーとして学校臨床にも携わっています。



私の研究テーマは、時間性、ナラティブ、TAT (Thematic Apperception Test ; 主題統覚検査) です。これは、『時間体験の異常に悩むクライアントに、セラピストはどのような心理的支援を行えるか?』という問題意識が基になっています。例えば、PTSDや解離の症状を抱えている人の場合、「あの時から時間が流れない」「時間が止まっているようだ」「時間がバラバラになってしまった」といった体験の仕方をすることがあります。通常であれば過去から現在、現在から未来の一方向に、なめらかに流れるものとして体験されるはずの時間が、その流れを失って静止しているように感じられたり、無数の『今』の散らばりとして体験されるのです。

近年、このようなクライアントとの心理臨床面接におけるTATの有効性が、ナラティブ・アプローチの立場から指摘されています。TATとは心理検査の一種で、図1のような図版から過去・現在・未来を含む物語を作らせ、その形式や内容から語り手のパーソナリティを読み解く投映法です。

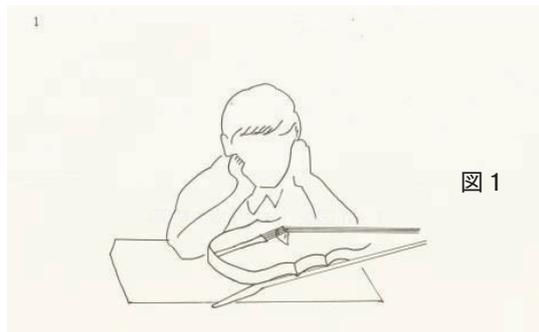


図1

ナラティブ (narrative) すなわち物語を重視する立場からは、物語の出来事と出来事を繋ぐ機能によって、語り手の過去・現在・未来が有機的に結ばれ、アイデンティティの連続性と斉一性感覚が明確になることで時間体験の変容に繋がる可能性が示唆されています (草島、2005など)。私はこの立場に立ち、現在はナラティブ・アプローチによる時間性の理論的検討を行っています。これは、心理的時間 (語り手の時間体験) だけでなく、物理的時間 (実施日時、初発反応時間など) や物語的時間 (プロット) といった多様な時間性を、野村 (2010 ; 2012) の系列時間論に依拠して整理する試みです。

本学会には、上述の野村直樹先生 (名古屋市立大学名誉教授) のご紹介で入会いたしました。臨床心理学分野だけでなく、様々な学問分野の先生方と活発な議論および心温まる交流を深めたいと思っております。

(神戸山手大学 楠本和歌子)



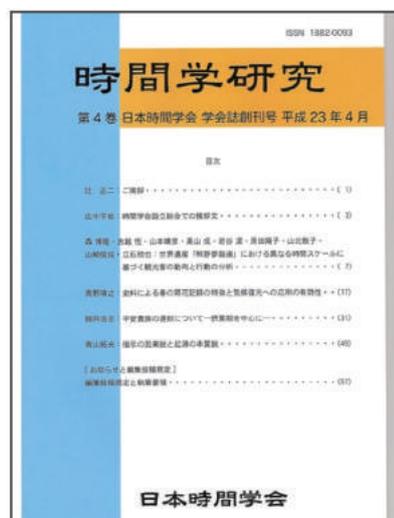
VII. 学会誌「時間学研究」投稿のお願い

日本時間学会では学会誌『時間学研究』第11巻（2017年刊行予定）の投稿原稿を募集しています。

卒業研究や修士論文を書き上げられたばかりの若手会員の方々をはじめ皆様からの積極的なご投稿をお待ち申し上げます。

投稿を希望される場合、学会ホームページまたは『時間学研究』末尾掲載の「投稿規定」「執筆要項」をご熟読の上、下記の要領でご投稿いただきますよう宜しくお願い申し上げます。

記



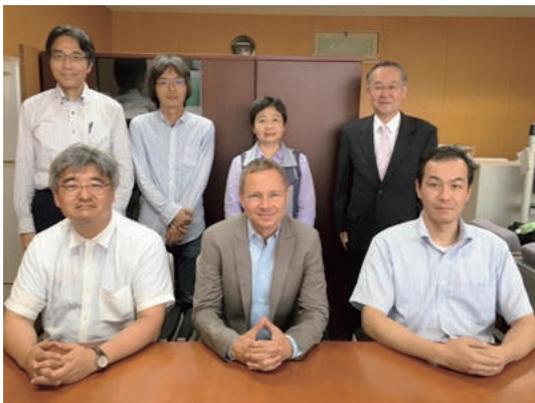
1) 提出するもの投稿原稿（和文要旨・英文要旨・図表等を含む）の電子ファイル（Wordファイル、テキストファイルの2種）

2) 提出手続き投稿原稿（図表等を含む）のファイルを添付した電子メールを編集委員会（mail@timestudies.net）宛に送付する。メールで送信できない場合には、プリントアウトした原稿1部（図表等を含む）とそれらのファイルを保存したCD-ROMなどを『時間学研究』編集委員会（〒753-8511 山口市吉田1677-1 山口大学時間学研究所内）へ送付する。

3) 投稿規定・執筆要項「日本時間学会会誌編集および投稿規定」（2009年7月20日施行）に準拠する。投稿原稿の分量は40字×30行で20ページまで（図表等を含める）。また論文には和文要旨（600字以内）と英文要旨を添付する。その他、投稿・執筆にあたっては『時間学研究』末尾頁ないし学会HP掲載の「日本時間学会会誌編集および投稿規定」を必ず参照のこと。

4) 未入会者の場合は投稿原稿提出と同時に入会手続きを行なう（入会の要領は学会HP「入会案内」を参照ください）

VIII. 第1回時間学国際連携会議を開催



平成28年8月1日（月）第1回時間学国際連携会議が京都工芸繊維大学にて開催されました。

会議には、シュタイネック・ラジ（国際時間学会（ISST）会長）、一川誠（日本時間学会会長）、藤沢健太（山口大学時間学研究所所長）、小山恵美（日本時間学会理事（京都工芸繊維大学））、細井浩志（日本時間学会理事（活水女子大学））、長谷川貴之（日本時間学会

理事（富山高専）、右田裕規（山口大学時間学研究所）、平田博子（山口大学時間学研究所）の8名が出席し、「国際時間学会ISSTとの国際連携について」を議題に、活発な意見交換をしました。

会議ではまず、小山理事によるレビュー発表の後、国際時間学会・日本時間学会・山口大学時間学研究所のそれぞれの活動について紹介し、抱えている課題などについて意見を交わした結果、今後、3団体による情報のコミュニケーション、お互いのアウトプット・情報共有、ワークショップの共催などが提案されました。また、長谷川理事から、日本での開催は視野に入れていないかとの質問があり、シュタイネック会長から、次回開催地は目下検討中ではあるが、3年後の国際時間学会大会（2019年）には、日本時間学会・山口大学時間学研究所が共同してパネル・特別企画セッションへ参加してほしいとの要望がありました。そのステップを踏んで、2022年の大会は日本で行う可能性もあるとし、日本側も前向きに検討したいとしました。国際時間学会としても、日本時間学会と時間学研究所の参加によって、自然科学研究者にも魅力的な大会になると歓迎されました。今後、日本時間学会のメンバーがISSTに参加する際の入会審査を省き、会費の割引なども考えている等、具体的な話にも及びました。現在、ISSTの中に日本研究者が増えていることから、国際的な学術協力の成果が出やすいこと（具体的には論文が通りやすい）ことなども補足されました。また、シュタイネック会長から国際時間学会の学会誌KronoScopeで日本時間学会と時間学研究所を紹介し、さらにニュースレターで「時間学の構築」などのBook Reviewをするのはいかがでしょうかと提案がありました。これにより日本の「時間学」を世界中に知らしめることが出来ると考えられるので、一川・藤沢両氏も前向きに検討することを承諾しました。

今後の国際連携に弾みがつき、実りのある協議が出来たことを確認して、第1回時間学国際連携会議は成功裏に閉会しました。

（学会事務局 平田博子）



Review 発表をする小山理事

IX. 会員著書・新刊紹介コーナー

— 青山拓央著 話題の新刊2冊を紹介します —

青山拓央（あおやま たくお / AOYAMA Takuo）1975年生まれ。
現在、山口大学時間学研究所准教授。専門は分析哲学、時間論。
哲学の観点から、おもに時間・言語・自由・心身関係を考察している。

『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』

（太田出版）

古典から現代までの哲学、諸科学や諸人文学、そして音楽や小説やプロ将棋などの知見を通じて、「幸福とは何か」「いかにして幸福になるか」「なぜ幸福になるべきか」の三つの問いが論じられています。読みやすく書かれた本ですが、専門家にとっても有益な議論が含まれ、時間と幸福の関係については第二章・第四章でおもに検討されています。2016年9月の刊行以来、毎日新聞、読売新聞、共同通信の各書評にて紹介されました。



『時間と自由意志：自由は存在するか』

（筑摩書房）

「未来の可能性の一つを自ら選ぶ」という意味での自由。そうした自由を人間が本当にもっているのかどうかは、哲学・科学上の大きな問題です。本書ではこの問題を取り上げ、従来の説明図式にとらわれないかたちで「自由」の新たな理解を探ります。博士学位論文（慶應義塾大学受理）を加筆のうえ書籍化したものですが、専門分野の異なる方にも読んで頂くことができるよう、工夫が試みられています。

XI. 来年度学会開催校のお知らせ

平成29年度日本時間学会開催地決定！

開催地：山口学芸大学（山口市小郡みらい町1丁目7-1）

<https://www.y-gakugei.ac.jp/>

開催日：平成29年6月10日（土）～6月11日（日）

学会員の積極的な
ご参加を歓迎します！

「意識と心の時間学」—生きたシステム科学との連携を求めて—（仮題）

X. 事務局からのお願い

- 学会ニュース平成28年度第3号（平成28年12月1日号）をお届けします。
- 平成28年度の学会費（年会費一般会員3,000円、学生会員1,500円）が未納の方におかれましては、何卒納入くださいますようお願い申し上げます。尚、納付書の紛失等ございましたら郵送いたしますのでご遠慮なくお申し出ください。会費振込先は下記のとおりです。
【振込先】ゆうちょ銀行 いちさんきゅう 一三九店 当座0087474 日本時間学会
- 住所・電話番号・所属機関などの異動等がございましたら、事務局まで御一報下さい。
メールアドレス mail@timestudeis.net（事務局：右田・平田）

編集後記

今年の大会は初の関西圏での開催ということもあって、会場の京都工芸繊維大学には、会員以外にも、飛び入り参加の在野の研究者が多く来訪し、懇親会も賑やかになった。また、二日目のセッションには、前列にずらっと居並び熱心に耳を傾ける若手女性研究者の姿が見られた。織田理事の提案で、今大会から新入会員の紹介をすることにしたのだが、十九名の新入会員のうち、北京からわざわざ駆けつけた時井氏を含め、何と十四名が集結。次世代の「時間学研究」の飛躍発展に大いに期待する大会となった。学会設立に尽力し、学会長として長く牽引して来られた辻正二先生が今期をもって会長職を勇退された。時間学研究所長時代から数々の薫陶を受け、先生から学んだことは数多い。パトナタッチした一川誠新会長の下で新たな理事会も発足し、第八回の大会は終わった。長嶋理事が自身の研究フィールドの情報処理学会の研究会で本会のことを「その名の通り、時間に関する森羅万象を全て対象としている何でもありの凄い学会で、どんな分野のどんな研究報告も全て参考になる。」と紹介した。これは紛れもない真実の声だろう。ウェブ理事会では、会員拡大のアイデアが熱く議論されている。「楽しい学会に所属して、残り少ない人生、何の意義がありますか。」橋元理事の言葉である。まさに異論はない。

（スーザン・H）

日本時間学会ニュース H28年度 Vol.2 平成28年12月1日発行

発行：日本時間学会編集委員会 〒753-8511 山口市吉田1677-1 山口大学時間学研究所気付

印刷：(有)いづみプリンティング 山口市旭通り2丁目6-47

